

令和2年度食品安全モニター課題報告
「食品の安全性に関する意識等について」
(概要)

I 調査の概要

1. 調査目的

食品安全モニターを対象とする調査から、食品の安全性に係る意識等について明らかにする。

2. 調査対象

食品安全モニター 446名

有効回答数 357名 (有効回答率：80.0%、回答者内識別紙参照)

3. 調査方法

インターネットによるアンケート調査

4. 調査期間

令和2年12月23日～令和3年1月18日

5. 調査項目

- (1) 食品の安全性に係る危害要因等について
- (2) 食品の安全性に関する意識等について

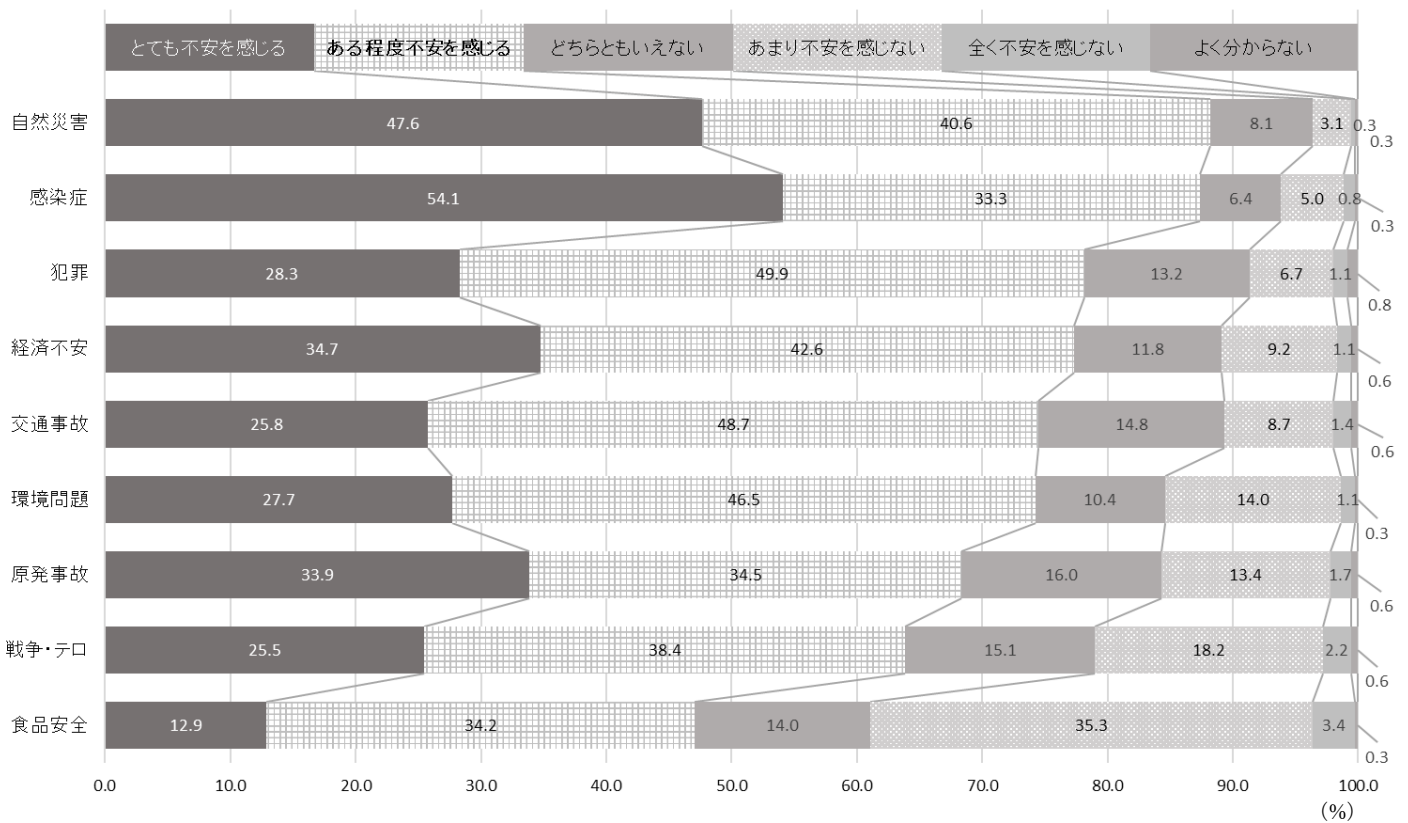
Ⅱ 結果の概要

1. 食品の安全性に係る危害要因等について

(1) 日常生活を取り巻く分野別の不安の程度

9つのリスク分野（自然災害、重症感染症、犯罪、経済不安、交通事故、環境問題、原発事故、戦争・テロ、食品安全）について聞いたところ、「とても不安を感じる」又は「ある程度不安を感じる」と回答した者の割合は、「食品安全」（47.1%）が最も低かった。各分野のうち、「自然災害」が88.2%、「重症感染症」が87.4%、「犯罪」が78.2%の順で不安の程度が高かった（図1）。なお、「食品安全」の不安の程度が最も低いのは6年連続である。

図1 日常生活を取り巻く分野別の不安の程度（n=357）

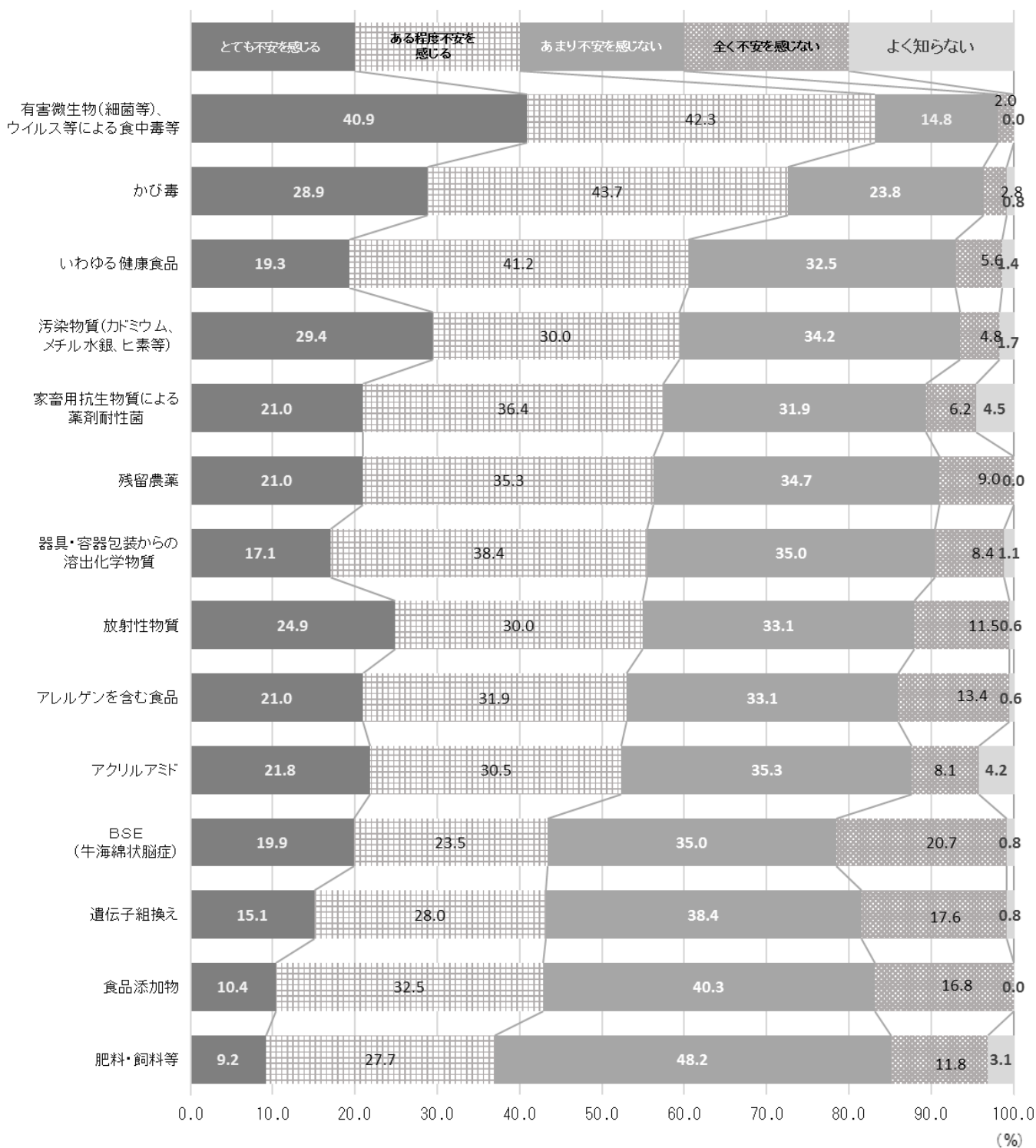


※「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の合計が高い順に並べたグラフにしている。

(2) 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度

食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安について聞いたところ、「とても不安を感じる」又は「ある程度不安を感じる」と回答した者の割合は、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」（83.2%）が最も高く、次いで「かび毒」（72.6%）、「いわゆる健康食品」（60.5%）、「汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）」（59.4%）の順であった（図2）。

図2 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度（n=357）



※「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の合計が高い順に並べたグラフにしている。

(3) 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度（年度別推移）

食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度の年度別推移をみると、「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」は、平成 24 年以降 9 年連続 1 位である。

2 位は「かび毒」、3 位は前回調査に引き続き「いわゆる健康食品」であり、平成 25 年度以降 60%を超えている。

表 1 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度（年度別推移）
（「とても不安である」「ある程度不安である」の合計割合の上位 7 位）

年度	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	7 位
今回調査	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（83.2%）	かび毒（72.5%）	いわゆる健康食品（60.5%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（59.4%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（57.4%）	残留農薬（56.3%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（55.5%）
令和元年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（85.1%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（66.1%）	いわゆる健康食品（62.6%）	かび毒（61.9%）	アレルギーを含む食品（59.9%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（53.9%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（52.8%）
平成 30 年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（86.7%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（66.9%）	いわゆる健康食品（64.9%）	かび毒（64.6%）	アレルギーとなる物質を含む食品（61.8%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（60.9%）	放射性物質（54.0%）
平成 29 年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（83.4%）	いわゆる健康食品（63.6%）	かび毒（62.0%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（59.1%）	アレルギーとなる物質を含む食品（57.5%）	放射性物質（51.5%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（49.9%）
平成 28 年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（82.8%）	いわゆる健康食品（61.7%）	かび毒（61.5%）	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌（59.1%）	放射性物質（56.5%）	アレルギーとなる物質を含む食品（55.7%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（51.9%）
平成 27 年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（75.7%）	いわゆる健康食品（64.4%）	放射性物質（58.4%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（53.2%）	家畜用抗生物質（51.8%）	残留農薬（51.3%）	食品添加物（48%）
平成 26 年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（78.5%）	放射性物質（64.1%）	いわゆる健康食品（64.1%）	残留農薬（58.8%）	家畜用抗生物質（55.4%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（53.6%）	食品添加物（50.4%）
平成 21 年度	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（79.6%）	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（78.1%）	残留農薬（73.1%）	家畜用抗生物質（68.2%）	器具・容器包装からの溶出化学物質（67.5%）	遺伝子組換え（64.6%）	食品添加物（62.5%）
平成 16 年度	汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）（91.7%）	残留農薬（89.7%）	家畜用抗生物質（83.5%）	有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等（80.9%）	食品添加物（76.4%）	遺伝子組換え（74.7%）	BSE（伝達性牛海綿状脳症）（74.5%）

※初回調査平成 16 年度より平成 26 年度まで 5 年置きに記載

2. 食品の安全性に関する意識等について

(1) 食品のハザードごとの不安を感じるきっかけ

食品のハザードごとの不安の程度に関する質問で「とても不安を感じる」、「ある程度不安を感じる」を選んだ人に「不安を感じるきっかけになったもの」についてさらに聞いたところ、不安の程度の高かった「有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等」（1位）、「いわゆる健康食品」（3位）では、「事件・事故等のニュース・報道を見て」が最も多く、「かび毒」（2位）では「危険性・有害性を示すデータを見て」が最も多かった（図3）。

図3 食品のハザードごとの不安を感じるきっかけ（複数回答）

	事件・事故等のニュース・報道を見て	テレビ・インターネット上の動画などで衝撃的な映像を見て	否定的・警鐘的な論調（新聞・雑誌・テレビ・インターネット・書籍・論文など）に接して	危険性・有害性を示すデータを見て	国や研究機関などからの情報提供を見て	友人・知人などから話を聞いて	両親など家族から話を聞いて	学校の授業を受けて	講習会・セミナー等に参加して	自分自身の身の回りの人が被害を受けたことがある	食品のパッケージに「無添加」の表示が書いてあるのを見て※	なんとなく	当てはまるものはない／答えたくない
有害微生物（細菌等）、ウイルス等による食中毒等(n=297)	26.9	16.5	12.8	21.2	14.1	4.4	2.0	13.5	14.8	14.1	0.0	0.3	5.4
かび毒(n=259)	15.1	11.6	10.8	20.1	10.8	2.3	1.2	11.6	8.9	5.4	0.0	2.7	6.9
いわゆる健康食品(n=216)	20.4	13.4	18.1	14.8	16.2	2.8	0.9	7.4	12.0	7.4	0.0	4.6	5.1
汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）(n=212)	16.0	16.0	20.8	20.3	12.3	4.7	2.4	5.2	9.9	0.5	0.0	9.9	3.8
家畜用抗生物質の薬剤耐性菌(n=205)	19.0	14.1	21.0	15.6	14.1	2.9	1.0	6.3	9.3	1.0	0.0	6.8	4.9
残留農薬(n=201)	29.4	18.9	19.4	29.4	13.9	6.0	2.0	6.5	15.4	2.5	13.9	2.5	2.5
器具・容器包装からの溶出化学物質(n=198)	17.2	17.2	22.2	21.7	13.1	5.1	2.5	5.6	10.6	0.5	0.0	10.6	4.0
放射性物質(n=196)	39.8	26.0	23.5	29.6	16.3	3.1	3.1	9.7	9.7	1.5	0.0	3.6	5.6
アレルギーを含む食品(n=189)	33.3	18.5	14.3	22.2	16.4	3.7	2.6	15.9	17.5	20.1	18.0	3.7	6.9
アクリルアミド(n=187)	15.5	17.6	14.4	27.8	18.7	2.7	1.6	9.1	11.8	0.0	0.0	3.7	3.7
BSE(牛海綿状脳症)(n=155)	39.4	29.7	20.6	25.8	16.1	1.3	1.3	9.0	12.3	1.3	0.0	3.9	1.9
遺伝子組換え(ゲノム編集含)(n=154)	22.7	22.1	29.2	16.9	13.6	3.2	1.9	11.0	11.0	0.6	18.8	10.4	5.8
食品添加物(n=153)	32.0	20.3	28.8	43.1	28.1	7.8	3.9	15.7	22.9	7.8	21.6	4.6	1.3
肥料・飼料等(n=132)	23.5	22.7	20.5	20.5	15.2	6.8	1.5	8.3	13.6	0.8	11.4	9.8	3.0

※当該選択肢は、食品添加物については「無添加」、残留農薬については「無農薬」、遺伝子組換え食品については「遺伝子組換えでない」、アレルギーを含む食品については「アレルギー」と読みかえる。

(2) 食品のハザード別リスクのイメージ

食品のハザードごとにリスクのイメージについて複数選択で聞いたところ、回答数が多かった上位3位までのハザードは「食品添加物」、「残留農薬」、「放射性物質」であった。このうち「食品添加物」、「残留農薬」では「メリットもあるので、ある程度は受け入れることができる」、「国の安全基準が科学的な健康影響評価によって設定されている」、「健康影響リスクをゼロにすることはできない」の回答が高い割合であった。「放射性物質」では「将来世代にまで影響を及ぼす」、「事件・事故が発生したときの被害が大きい」、「摂取するたびに人体に蓄積されている」の回答が高い割合であった。

表2 食品のハザード別リスクのイメージ
(回答数が多い上位3位のハザード、複数回答)

(各イメージの回答数/有効回答者数 (n=357) (%))

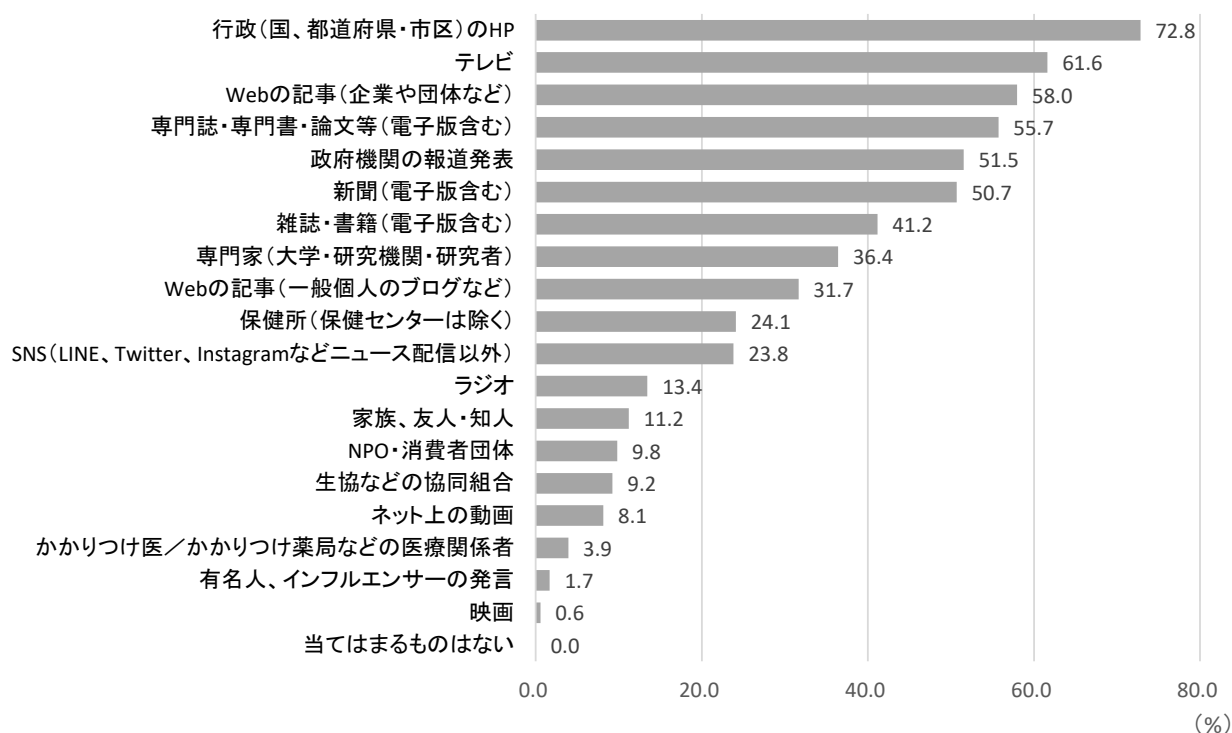
	摂取する たびに人 体に蓄積 されてい る	健康影響 リスク をゼロに すること はできな い	事件・事 故が発生 したとき の被害が 大きい	将来世代 にまで影 響を及ぼ す	国で定められて いる基準値内 (法律・基準に 則って認められ ている)であれ ば、含まれる可 能性が高い食品 でも摂ることが できる	いったん 被害を受 けると回 復が難し い	国の安全 基準が科 学的な 健康影響 評価に よって設 定されて いる	生産者、 食品製 造・流通 過程の安 全管理 施策・体 制が確立 している	科学的に 未知、不 確かなも のである	メリット もあるの で、ある 程度 は受け入 れること ができる	国など行 政による 安全管理 施策・体 制が確立 している	食品表示 によって 消費者の 選択肢が 確保され ている	どのよう に安全管 理されて いるか 知ってい る
食品添加物	29.4	49.3	16.0	21.3	44.0	10.6	55.2	24.9	16.5	57.7	37.5	46.8	35.9
残留農薬	27.2	45.4	33.1	24.4	34.2	16.8	47.3	27.5	10.4	41.2	36.1	9.2	30.3
放射性物質	34.5	30.0	40.6	47.3	17.6	34.2	33.3	18.5	24.6	7.3	27.5	5.0	18.5

(3) 食品の安全性に関する情報を得る情報源

食品の安全性に関する情報を得る情報源について聞いたところ、「行政(国、都道府県・市区)のホームページ」の回答が72.8%と最も多く、次いで「テレビ」が61.6%、「Webの記事(企業や団体など)」の回答が58.0%であった(図4)。

図4 食品の安全性に関する情報を得る情報源(複数回答)

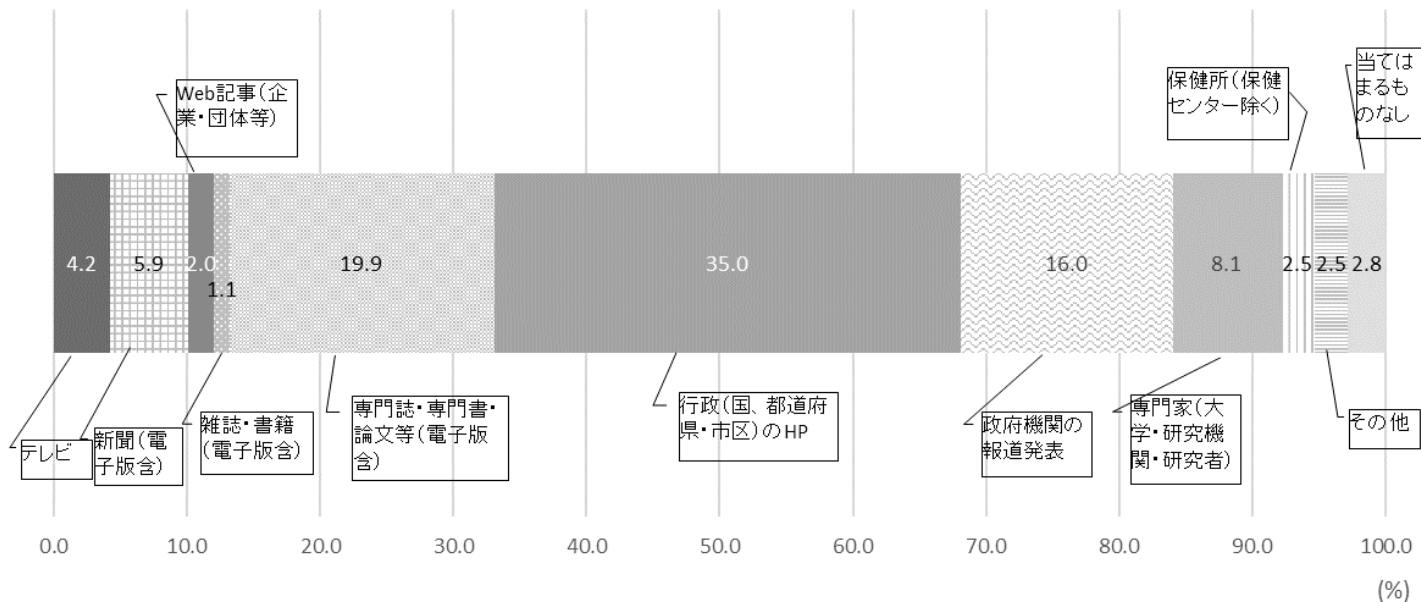
(各情報源の回答数/有効回答者数(n=357) (%))



(4) 食品の安全性に関する最も信頼できる情報源

食品の安全性に関する最も信頼できる情報源について聞いたところ、「行政（国、都道府県・市区）のホームページ」が35.0%と最も高く、次いで「専門誌・専門書・論文等（電子版含む）」が19.9%、「政府機関の報道発表」が16.0%であった（図5）。

図5 食品の安全性に関する最も信頼できる情報源（n=357）

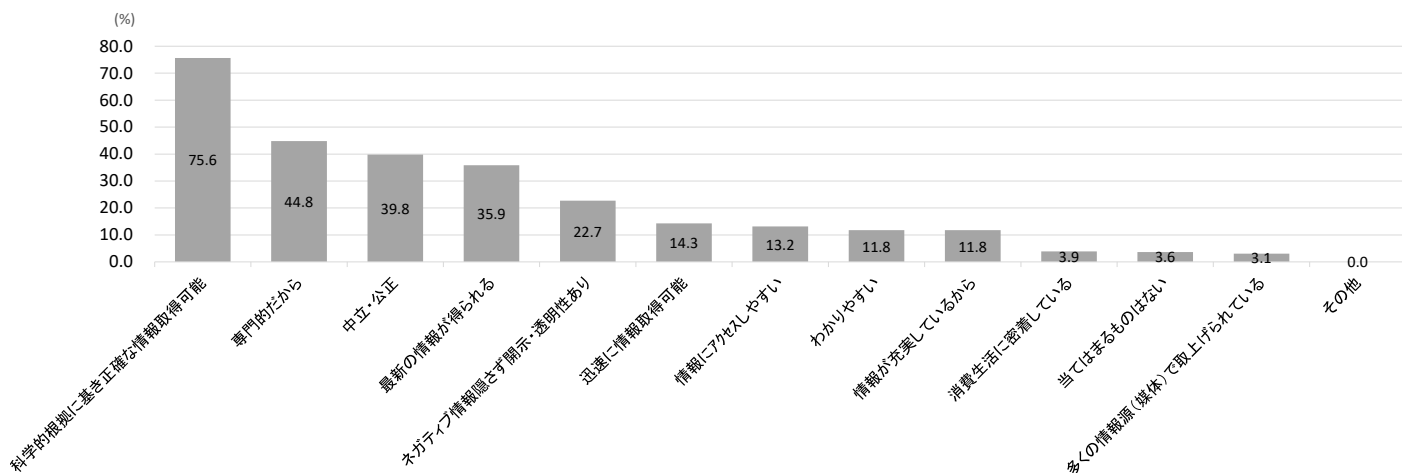


(5) 最も信頼できる情報源である理由

(4) の最も信頼できる情報源について信頼できる理由を聞いたところ、「科学的根拠に基づいた（科学的で）正確な情報が得られるから」が75.6%と最も多く、次いで、「専門的だから」が44.8%、「中立・公正だから」が39.8%であった（図6）。

図6 最も信頼できる情報源である理由（複数回答）

(各理由の回答数/有効回答数(n=357) (%))

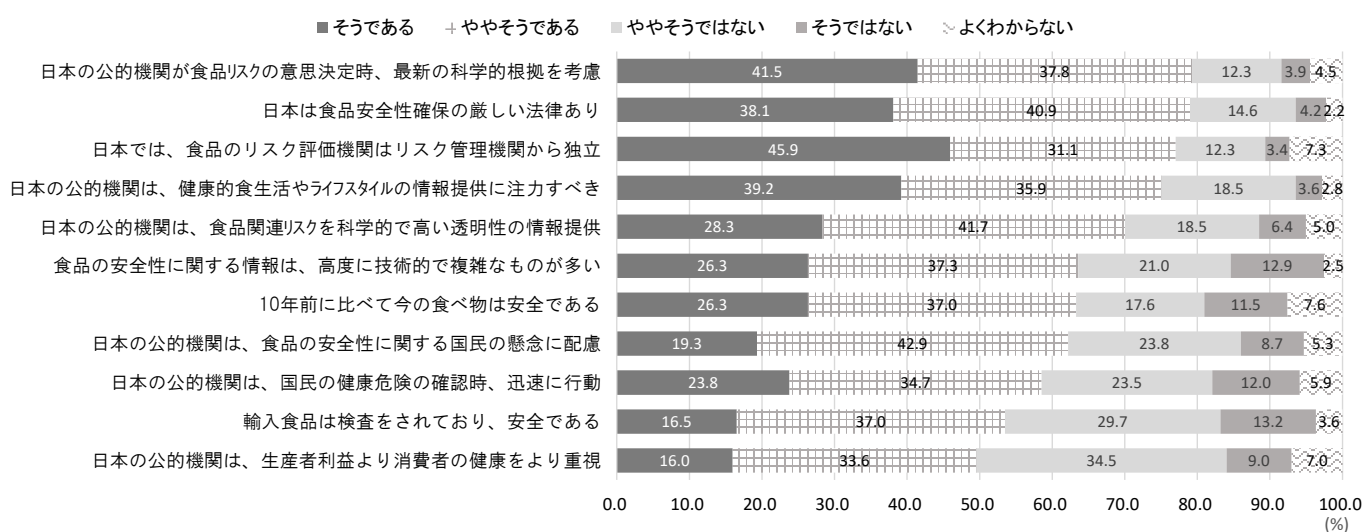


(6) 食品の安全性についての認識

食品の安全性についての認識について聞いたところ、「そうである」又は「ややそうである」と回答した者の割合は、「日本の公的機関が食品リスクに関する意思決定を行う際には、最新の科学的根拠を考慮に入れている」が79.3%と高く、次いで「日本では食品の安全性を確保するために厳しい法律がある」が79.0%と高かった。

このほか「日本では、食品のリスク評価機関はリスク管理機関から独立している」や「日本の公的機関は、健康的な食生活やライフスタイルに関する情報提供にもっと力を入れるべきである」についても、「そうである」又は「ややそうである」と回答した者の割合が高かった。

図7 食品の安全性についての認識 (n=357)



(7) 普段はどのような食事の取り方をしているか

普段の食事の取り方について聞いたところ「自宅で食べることが多い(自分が調理)」の回答が52.7%で最も多く、次いで「自宅で食べるが多い(家族・同居の方が調理)」が38.9%であった(表3)。

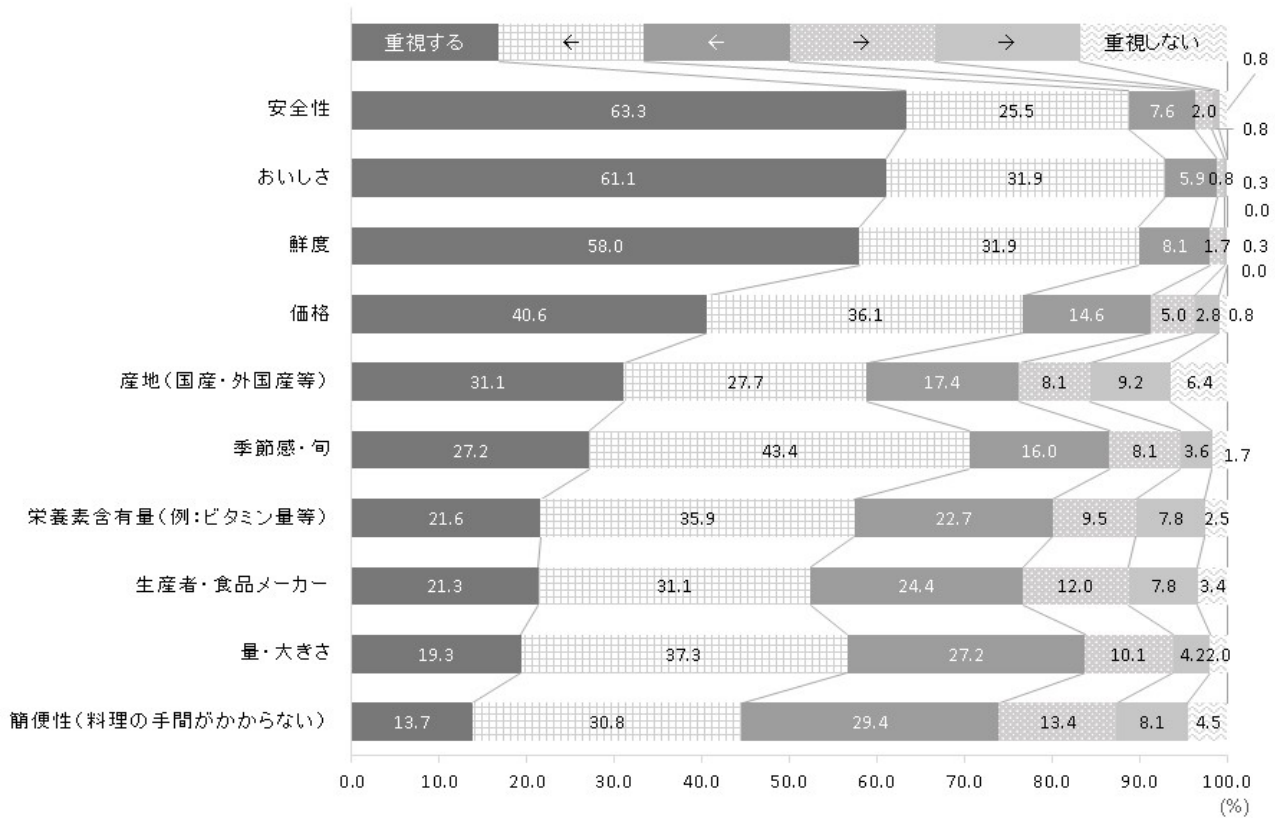
表3 普段はどのような食事の取り方をしているか (n=357)
(%)

自宅で食べるが多い(自分が調理)	52.7
自宅で食べるが多い(家族・同居の方が調理)	38.9
自宅で食べるが多い(自分が惣菜・弁当を購入)	5.6
自宅で食べるが多い(家族・同居の方が惣菜・弁当を購入)	0.6
自宅で食べるが多い(出前・デリバリーを利用)	0.3
外食が多い	2.0

(8) 食品購入時にどの程度重視するか

食品購入時に考慮すると思われる事項についてどの程度重視するか、それぞれ「重視する」から「重視しない」まで6段階で選択してもらったところ、「重視する」の回答が最も多かったのは「安全性」で63.3%であり、次いで「おいしさ」、「鮮度」であった(図8)。

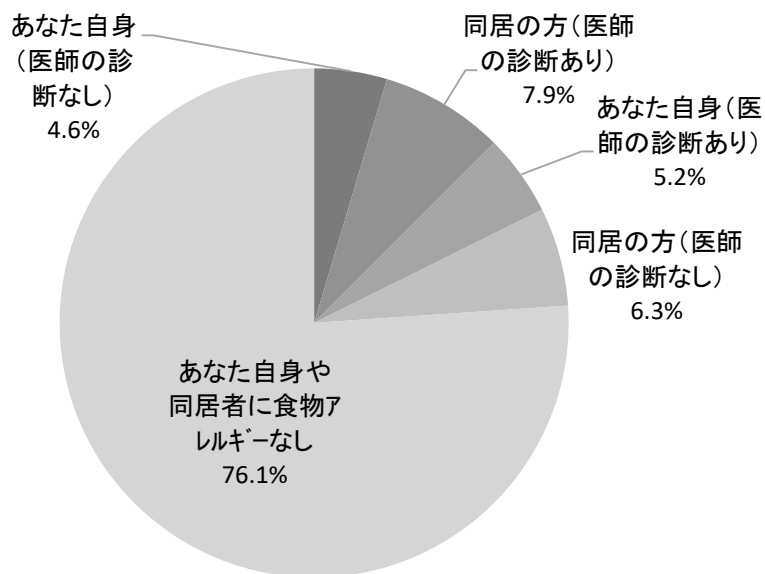
図8 食品購入時にどの程度重視するか (n=357)



(9) 自分自身と同居の者の食物アレルギーの有無

回答者自身と同居の者の食物アレルギーの有無についての質問では「あなた自身や同居者に食物アレルギーをお持ちの方はいない」との回答が76.1%であった(図9)。

図9 自分自身と同居の者の食物アレルギーの有無(複数回答)

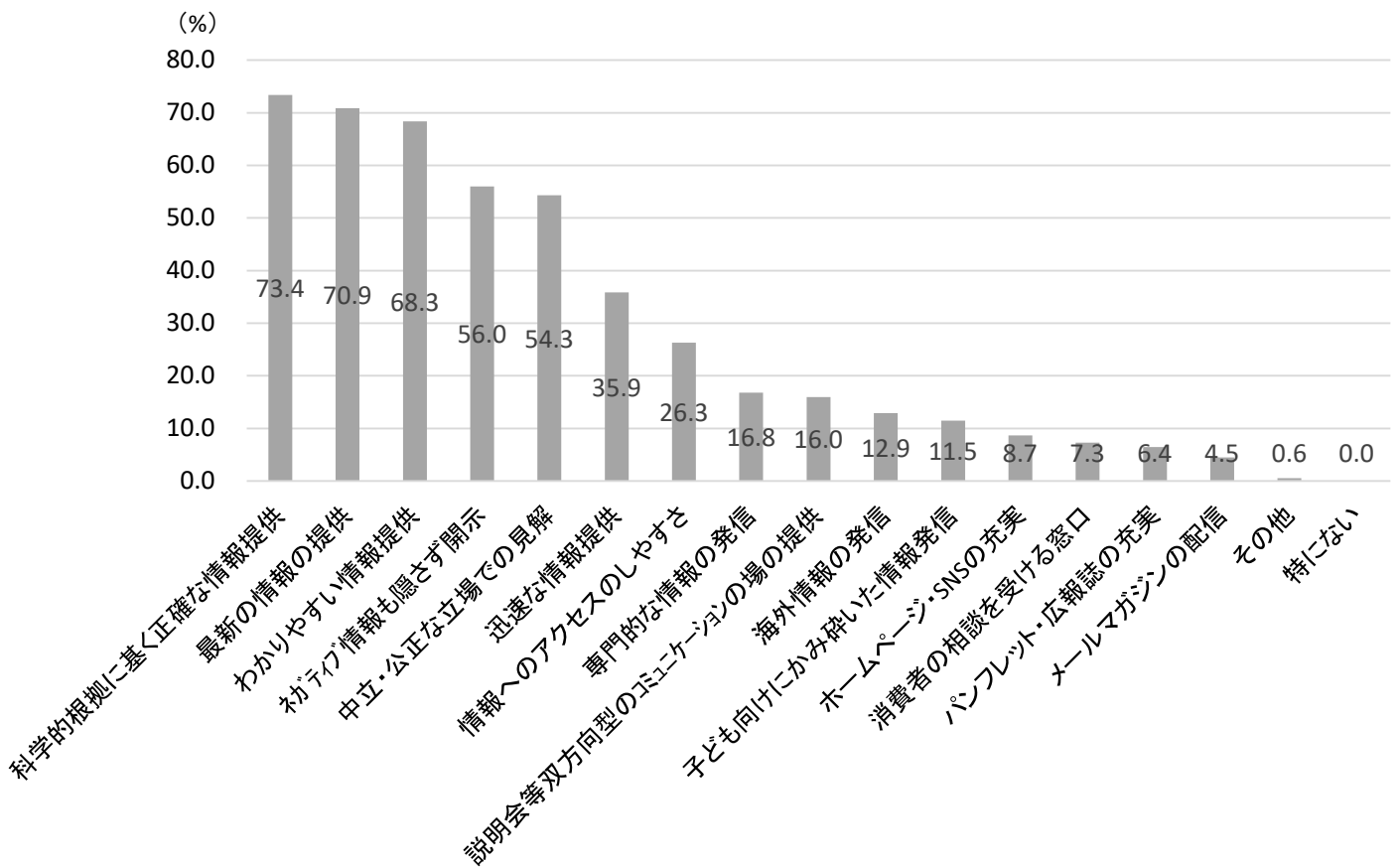


(10) 食品の安全性の情報提供で、食品安全委員会に期待すること

食品の安全性の情報提供で食品安全委員会に期待することについて聞いたところ、「科学的根拠に基づいた正確な情報の提供」の回答が73.4%と最も多く、次いで「最新の情報の提供」が70.9%、「わかりやすい情報の提供」が68.3%であった(図10)。

図10 食品の安全性の情報提供で、食品安全委員会に期待すること(複数回答)

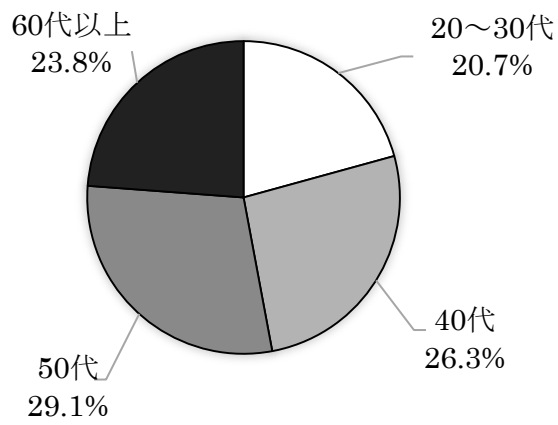
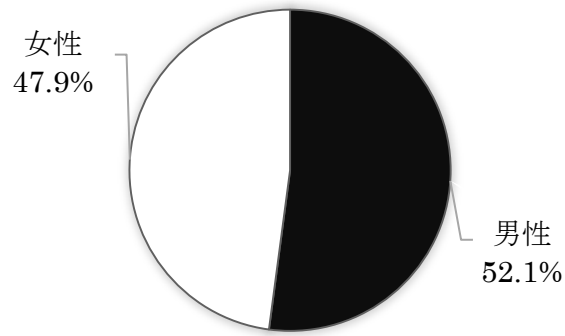
(各期待の回答数/有効回答数(n=357)(%)



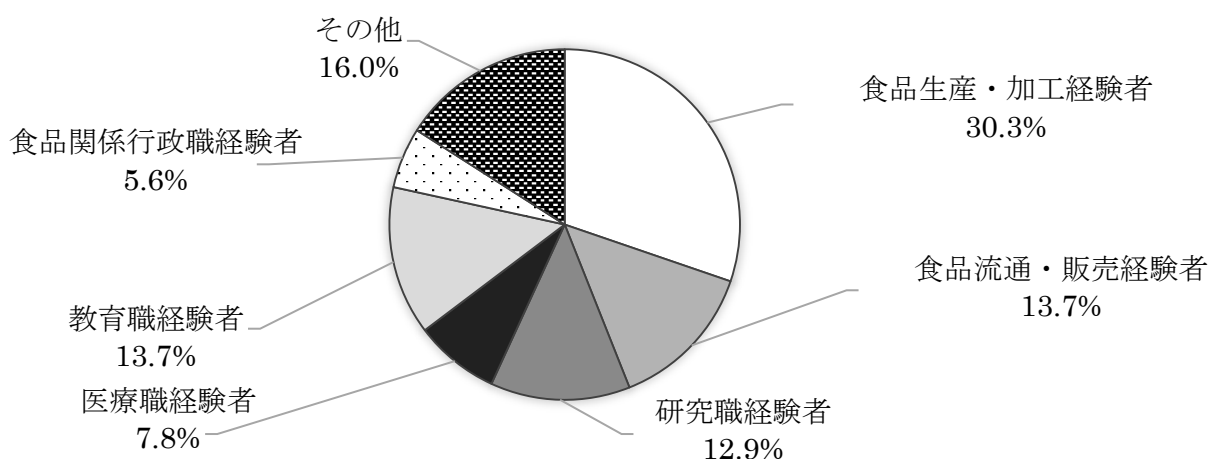
以上

調査回答者の内訳

① 性別・年代 (n=357)

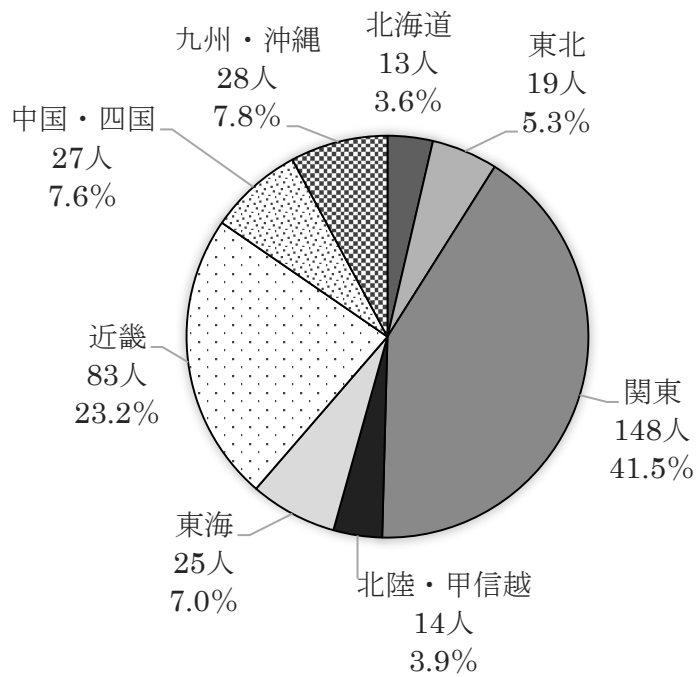


②職業経験 (n=357)



	性別		年代区分				合計
	男性	女性	20～30代	40代	50代	60代以上	
食品生産・加工経験者	71人	37人	12人	36人	37人	23人	108人
	66%	34%	11%	33%	34%	21%	100.0%
食品流通・販売経験者	30人	19人	8人	17人	14人	10人	49人
	61%	39%	16%	35%	29%	20%	100.0%
研究職経験者	30人	16人	9人	17人	8人	12人	46人
	65%	35%	20%	37%	17%	26%	100.0%
医療職経験者	9人	19人	6人	5人	12人	5人	28人
	32%	68%	21%	18%	43%	18%	100
教育職経験者	12人	37人	11人	10人	18人	10人	49人
	24%	76%	22%	20%	37%	20%	100.0%
食品関係行政職経験者	15人	5人	2人	0人	4人	14人	20人
	75%	25%	10%	0%	20%	70%	100.0%
その他	19人	38人	26人	9人	11人	11人	57人
	33%	67%	46%	16%	19%	19%	100.0%

③居住地 (n=357)



④モニター継続年数 (n=357)

